

# No. 902

観光の島

## 小笠原

日本本土から南へ1,050 km。  
東京晴海埠頭から船でおよそ48時間、そこに常夏の島、小笠原諸島が点在する。  
昭和43年6月26日米国から返還され、今年で3年目を迎える。  
国や東京都の保護の元にあったこの島々も、この6月26日からは独り立ちする。  
この小笠原の中心地父島には約300人の島民が生活をしている。その内の半数近くは、役場など公共機関に勤め、あとの人達は第一次産業の漁業にたずさわっている。  
島が、生きる為には観光しがなく、その点では本土には見られぬ美しい自然と環境に恵まれている。だが、そこには食料や水源などの大きな問題が今だに解決されていない。島民達も、観光地小笠原を夢みながらも、その表情には複雑なものがある。

## ああトウチャン

団地の朝。  
あっちのむねから、こっちのむねからチトウチャンの大打進。働きバチが群らがるように足早に駅へ駆ける。  
ガンバラナクッチャ、ガンバラナクチャ。電車におしこまれたトウチャンは、おしだまって都心になだれこむ。  
トウチャンが去った団地の昼下り。  
カアチャン達の優雅なひととき。時の流れ去るのも忘れて、小鳥のようにさえずる。暇をもてあまして、ゴルフをするカアチャン、特売場をあさるカアチャン。トウチャンをとりまく環境は厳しい。  
戦いおえて日が暮れて。  
夜の巷をさまよい歩きゃ、ネオンサインが誘いの笑顔。腰すえて飲めばカアチャンのこわい顔。家路をたどる頃、すでに足元さだまらず、終電車には乗遅れ「私の人生暗かった」  
日曜日。  
トウチャンの願いも空しくドラブ行脚。ポートだ、写真だ、やれ子守。トウチャンの休まる時はない。カレンダーをめくれば、日曜、祭日のオンパレード。くたばれゴールデンウィーク、ああトウチャン。

(昭和46年4月30日 封切)